

佑啓

ゆ う け い

発 行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110-1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

問題は目の前

里見 吉英

今年度、佑啓会は職員の結婚ラッシュだ。目出度いことは幾らあっても良い。しかし、毎月のように披露宴で「ご挨拶を・・・」となると、いつか新郎新婦の名前を間違えてしまうのではないかとヒヤヒヤしている。若い二人の門出で粗相があってはいけない。

人生には様々な節目がある。入学、卒業、就職、転居、出産、その時々には胸に去来する不安と希望。少しずつ、自分の「脚力」を付けて自立していく。しかし、皆が一律にこうあるべきという道はない。人それぞれであって良い。高砂に座る幸せ一杯の二人にお話しする時、「笑顔の絶えない家庭を築いてください。」なんて絶対に言わない。

そんなの私を知る限りテレビの中のサザエさん一家しか見たことがない。生まれ育った環境も生活文化も違う人間が共同生活を始めるのだ。笑顔ばかりではいけない。人間が二人以上いればお互いを受け入れ、支え合い、そして我慢が大切である。

機関紙

今、発達障害も含めて、一〇人に一人は障害者と言われている。

そこで共生社会を創っていく事は身近に障害を持つている人をどういう形で受け止めていくかを考えなくてはならない。それでは今はどうなのか。私たちが対象としている利用者の現状は様々である。グループホームで生活している方、在宅の暮らしが安定している方、入所施設を利用している方、色々な方がいる。でも一番困っているのは障害の重い人たちの受け入れられる場が少ないこと。私たちのところには千葉県だけでなく、埼玉、東京、神奈川の行政から利用希望の問い合わせが、頻繁に来る。「地域の施設に長年通っていたのが親御さんが高齢により今までの生活が維持できなくなった」「保護者が入院するから預かって欲しい」など。最近多いのは行動障害で受け入れる施設がないようなケースだ。グループホームでの受け入れは困難、近隣の入所施設はどれも一杯、なんとか受け入れ先は無いかとの問い合わせである。こういう人たちを含め、ふる里学舎全体でショートステイ利用者は六〇名近くいる。そしてほとんどが

利用の長期化に至る。体験利用とか週末利用、レスパイト、緊急対応など本来の目的は長期間のショートステイに取って代わってしまった。どこの入所施設もこんな現状である。

一方、地域生活の代名詞であるグループホーム。ふる里学舎では、各地域で約一〇〇名の方が生活している。私たちの考えはある程度自立した方たちを対象としている。ご本人の意思と適性を判断し、ご家族も納得のうえ、福祉的就労や生活介護の事業所へ通ったり、一般企業へ通勤したりしている。

しかし、残念なことではあるが、街の中で地域住民の方々や交流して生活できているか、形だけは市民だけれど、街の中で孤立してはいないか、いい人ばかりで見守ってくれるかといったら、現実はどうとばかりは言えない。ただ、入居者はそんなことには無頓着で明るく生活し、心配しているのは職員ばかりである。



もちろん私は、グループホームを批判しているのではない。国が掲げた、入所施設を整備しない方向性、地域生活の流れを創る理想に対し、入所施設の現場の状況から、何とかしなければ思っているのである。施設から地域へと形ばかり先行している一面はないか。過去の人権侵害等反省点は多くあるが、これを止め、新たなスタイル(セイフティネット機能を持た

せた)のホームを整備する土壌、国民的な理解は整っていない。理想と現実の乖離である。

都市部では、一般の住居であるグループホームも地域の理解を得ることが難しい。

一方特別養護老人ホームに反対する人たちは少ない。不足していることは周知のこと、いずれ利用するかもしれないという考えなのだろうが、特異な生活様式という視点では、障害者の入所施設と変わらない。手厚い支援・介護に安心や安全を求め、家庭生活の限界を解決する手段であるとの判断だろう。



株式会社の参入によって、軽度の障害者のサービス量は増え、障害者の選択肢は確かに広がった。ところが重い障害者に対しての支援体制はどうか、虐待防止等の意味を含め、各所で強度行動障害の支援のあり方の研修を開催しているが新たな要支援者に対する場の想定がない。

最近受けたケースでも、居室の壁に体をぶつけ穴をあける。鍵を外して二階から飛び降りる。安全を優先する環境の対応にも限界がある。グループホームではもちろん無理であり、入所施設でも対応に苦慮する。こういう人たちの支援には、医療機関等など関係者との協力が不可欠だと思うが、これが意外と難しい。医療の対象ではないと判断されたら家族と同

じく放り出された気持ちになる。流れは病院から、或いは矯正施設からの受け手となり障害分野の守備範囲の拡大とともに不安を残す。このような人たちをどこで受け入れるべきか。そこが問題だ。こうしたケースの場合、優先しなければならぬのがご家族の負担の軽減である。理想は地域での解決策であるが、現状ではなかなか難しい。

最近、重症心身障害者のお母さん方と話す機会があった。在宅の医療ケアを必要とする方々の苦勞を聞きながら、この人たちの受け入れ先の少なさも何とかしなければならぬと痛感した。ご家族の健康さえ危ぶまれる状態にある。しかし、私どもで受けましようと言えぬ状況でもない。お母さん方からみれば、逃げ口上のように映ったかもしれないが、命を預かることにし、無責任な事は言えない。ここでも福祉と医療の連携の問題が残る。増加する重症児者にどう向き合えばいいのか。システムの未整備に突破口はないか。医療と一体で整備するなど考えていかなければならないと思う。



自立生活援助と言っても、援助によって自立して生活できる人は良いが、私たちが対象としている殆どの方は二十四時間の見守りが必要な人たちで、そういう人たちはやはり入所施設を希望している。グループホームでは世話人さん

一人で四人から六人を支援する。我々バックアップ施設がサポートしてもやはり、入所施設へと戻る方もいる。

街で生活するのが理想と言う方も沢山いるが、やはり障害の重い方、行動障害のある方は前述のように難しい対応を迫られる。

今まで地域での生活しか考えられなかった、家族だからと頑張りすぎて、本人も限界を迎えてしまい、お母さんも途方にくれる。入所施設を利用し、少し離れてみる、そんなことで新たな道が見えてくることもある。



改正障害者総合支援法。目玉の一つは「自立生活援助」。国は入所施設や病院、さらにはグループホームから単身生活などによる地域での生活に移行する方向性を二％という数値目標まで掲げて強めている。しかし、医療ケアについては、適切な支援を受けられるよう自治体において、保健、医療、福祉等の連携促進に努めるとしか言っていない。重い障害を持つ家族の負担を考えると、施設でできることは進め、新たな試みも模索しなければならぬ、とお母さん方の声に強く思った次第。(佑啓会理事長)

息子と共に

杉田 泉



今年二十七歳になる息子は、一言で表現するなら「動くしやべる重症心身障害者」、いわゆる強度行動障害、支援の必要な目安となる区分は当然6。昨年4月から「ふる里学舎」となった蔵波でお世話になっています。「ふる里学舎」とのご縁は、養護学校高等部卒業後に福祉的就労に就き、行動援護の支給決定を二人対応可で月に百七十時間以上もって支援を受けていてもなお、自宅で家族が見ていくのは大変厳しい状況だったので、短期入所も利用していこうという流れの中で市原の学舎見学が最初でした。

その見学直後に父親が急死し、本人は自宅以外の生活は経験がないので暴れまわ中、ヘルパーさんと相談員さんはもちろん、地元警察の生活安全課の人や役所の人に何度も助けてもらい、やつとの思いで浦安から市原まで連れて行き、初めての短期入所を3泊くらいしたでしょうか。自宅はすぐそこが浦安の海というところのマンションの四階、敷地のすぐ横は海につながる大きく深い川で、ヘルパーさんがついていてもダッシュで川に飛び込みレスキュー騒ぎになったり、四階から物干し竿やガラスコップを落としたり、自分もベランダフエンスから落ちようとしていたり、トイレのウォシュレットの線をとってトイレ周りの廊

下を水浸しにしてしまったり、コンビニでは欲しいものを買って、イライラすると弱い人、例えばそこにたまたまいたおばあさんを突き飛ばしたり、本人のエピソードは数えきれません。そんなわけでなおさら母親一人では本人希望の自宅での生活を続けさせることはできず、施設での暮らしを選択せざるを得ませんでした。そうは言っても大変な彼の面倒を見なければならぬ、県内のたくさんの施設を母が見学して探し回り、約三年で七カ所の施設の短期入所をロングやショートでつないだ末に、平成二十四年七月から千葉県社会福祉事業団の「アドバンスなうら」に入所となり現在に至っています。



世の中一般的には入所ができれば安心と思われそうですが、何せ「動くしやべる重症心身障害者」なので、支援というよりは、悪いことをしないように見張る、薬を過剰に使う、日ごろから力でねじ伏せる、恫喝するなどなどあったように思います。(悪く言うようでごめんなさい) 本人に心地よくない状態は、周りの利用者さん達にも支援者側にも負のスパイラルに陥ってしまうので、そこから脱するため、中学生のころから継続している相談支援機関がつなぎ役となつて、千葉県発達障害者支援センターC.A.S.にも入つても

野球部全国へ！

関岡 弘太



入職して四年目を迎えたこの四月。三年間配属されていたパン製造科から入所生活係へと異動となった。ぼっちやり体型の私は、入職以来パンを作り続けていることもあつて、利用者さんや職員に「ジャムおじさん！」などと親しみを込めて？呼んで頂いている。異動といつてもしぜん工房からふる里学舎へ変わっただけで、なんら変わりはない。利用者さんの事も皆知っている。大丈夫だ・・・と思

っていた。が、しかし、実際に生活の業務が始まり、利用者さんの生活面をサポートすることの難しさを痛感している。今までは、就職に向けての支援がメインで、働くとはこういうことである！と、利用者さんに背中を見せて働くこと、美味しいパンを作り売り上げを伸ばすことを考えて日々邁進してきた。生活係では、利用者さんが如何に生活しやすいた環境作りをしていくかを日々考える。今までは以上に細やかな気付きと行動力が必要とされる。当然、それは売り上げのように数字に成果が出るものではないから、また難しい。毎日が勉強の日々・・・福祉の奥深さを改めて実感すると同時に、幅広く様々な分野から福祉を学ぶことの出来る佑啓会の魅力を体感している。勉強の日々にも時には息抜きが必要である。大好きな野球。野球をしている時だけは、仕事の事を忘れて思いっきりフレッシュすることができる。決戦の日、五月二十七日に第三



十五回全国社会福祉軟式野球大会予選。私自身は過去3度、いずれも全国大会への切符を逃している。今年こそ・・・。今年は、新任職員が三名、マネージャー一名、フレッシユメンパーが加わり、一層全国大会出場という意気込みが強くなり練習にも熱が入った。チーム内のレギュラー争いは激化し、キャプテン松尾主任は焦りを隠そうと「まだまだ若いには負けられない」と張り切って見せる。里見理事長が、新しくバットを購入して下さり、まさに鬼に金棒。チームは最高潮で当日を迎える。

大会当日、天気にも恵まれ最高の野球日和。初戦、東京都の池上長寿園ツインズとの試合。新任職員のエース椎名支援員の好投、打線もチャンスで上手く繋ぐことができ十対二で快勝。

二試合目は千葉県内のみずき会ミッドナイトビーズとの試合。みずき会ミッドナイトビーズは、昨年千葉県福祉協会が主催の野球大会で優勝をしている宿敵である。二試合目も一試合目同様の椎名支援員が先発投手として出場。一試合目の疲労は感じられないほどの安定感で、素晴らしいゲーム作りをしている。打線は、1試合目同様チャンスで打線が繋がりが初回集中打で相手から十三点奪い取り見事十五対一で勝利した。八年ぶりの全国大会出場を勝ち取ることができた。私自身も昨年度の全国大会まであと一歩という悔しさを味わっていたが、勝利した

時には二試合やつた疲れなどは吹き飛び舞い上がってしまった。「バットのおかげだな。」と里見理事長。いやいや、実力ですよ。」と試合に出ていないキャプテン松尾主任。ベンチに、ワハハと笑い声が溢れる。試合を終えて改めてチームワークの大切を知った。打つ人がいる。守る人がいる。投げの人がいる。声を出して盛り上げる人がいる。ファールボールを拾う人がいる。チームを引っ張る人がいる。バットを買ってくれる人がいる。皆が同じチーム。助け合い、支えあう。誰かがミスをしてしまったら皆でカバーする。それは野球だけではなく仕事でも同じことが言えるのだらう。



編集後記

(ふる里学舎 支援員)

平成五年、ふる里学舎オープンとともに創刊した「佑啓」は皆様のおかげにより今号でついに百号を迎えました。足かけ二十五年、積み重ねることの大切さや紡いできた歴史の重さをひしひしと感じます。時代は変わっていきませんが、理念や支援の核となる部分が変わることなく次世代へとつなげていければと思います。今後も皆様と共に歩んで行きながら、ご愛読頂ければ幸いです。蔵波から佑啓百号をお送り致します。

越川 直人